

会議大好き

理事長になって確実に増えたのは会議の数である。自分が議長をつとめる理事会や学園内の各委員会に加えて、対外的にもいろんな会議に出席するようになったからである。理事長職との関連ではなかったが、同じころから国際カトリック



南山大学学長 ミカエル・カルマノ 34

大学連盟(IFCU)の会議に出席する機会も多くなった。現代社会におけるカトリック大学の使命について、連盟の総会やワーキンググループで発表することから始まったが、ウガンダで行われた2003年の総会から理事 (board member) になり、さらに2009年から副会長に就任することになったのである。

出会いや発見が生まれる

今年の4月にアメリカのある評論家の言葉に出会った。「People who enjoy meetings should not be in



赤道線の上立つ (ウガンダで開催されたIFCU総会)

っていた私であるが、参加するだけでなく、司会として会議を仕切る立場になってから、その誘惑について考えるようになった。問題を自分なりに整理し、二通りの課題があると思い至った。一つは、強引な独裁政

charge of anything。一「会議が好きなのに仕事を任せては絶対駄目」と。「会議大好き」が口癖とな

効率的に先進することである、といつもりはしない。国内の会議でも、1時間の会合のため片道3時間の移動が必要となることも珍しくないが、国際会議になればその比率はもっと悪化する。インターネットを使った遠隔会議や、メールでの稟議が簡単にできる情報技術が発展した現代なので、会議のために出かけることは、(私の偏見で表現すれば) 昼食を食べることや英会話学校に通うことと同様、時間とお金の無駄である。しかし、会議を諸悪の根源とし、組織運営において会議の重要な役割を否定する、ということはない。人と一緒にいる時間であるからこそ、会議を積極的に利用すべきチャンスだと私は思う。無駄と思われていた会議の時間や不便な遠方の開催地の会議からも度々新しい発見が生まれてくる。例えば、ウガンダに行き会議に参加した時には、アフリカのカトリック大学の現状を自分の目で見てとができたし、北半球と南半球で違う方向に渦を巻いて流し台から流れてゆく水が、赤道の真上でもちゃんと渦を巻いていることも実験で実証できたのである。